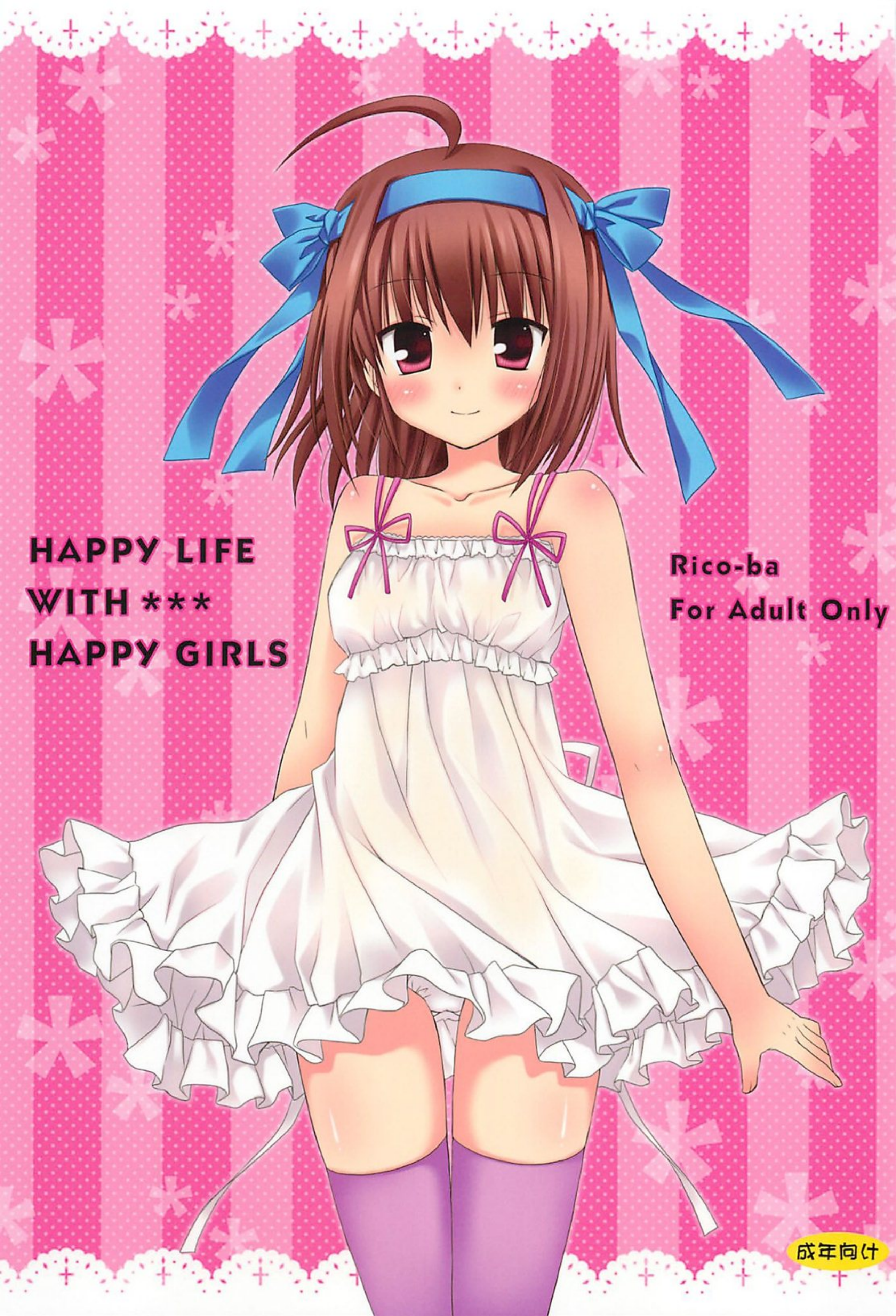

HAPPY LIFE
WITH ***
HAPPY GIRLS
Rico-ba
For Adult Only
成年向け

P04～
恋空 ～koisora～
作:Rico

P21～
HAPPY LIFE WITH HAPPY GIRLS
作:taca

「お兄ちゃんが好き」
…そう言うと
お兄ちゃんは笑って
「ありがとう」
と言った

私は…少し
悲しかった…

お兄ちゃんにとっての私は
我が子のようなもの
きっと恋愛対象には
なってない

あの告白も「家族愛」
と思われただけ

でも…でも
私は……

大好きだよ…
お兄ちゃん…

ぽそっ

カチャッ

てとてと…

もぞもぞ

やばっ…
お兄ちゃん
帰ってきちゃたッ
早く寝ないと
明日起きれない…

もうそんな
時間!?

……

……

このカーテンが
なかったら
お兄ちゃんの
寝顔が見れたのにな…

って私たちが
付けたんだけどね…

フウッ

うっ…

ハアッ

ハアッ

がばっ

…っ！

く…っ
ハアッ

お兄ちゃん
苦しそうな声
してる…！

莱…香さんっ

ハッ

ぺたっ

…やっぱり
莱香さんか……

って今はそんなこと
考えてる場合じゃ
ないっ…！

どうしたの？
大丈夫…
お兄ちゃ…

ぎゅっ

……

……きっ

かあああああ

空ちゃん！

ばっ!!

むぐっ

みんな起きちゃうから静かにっ……！

ドキ

ドキ

静かに…っ

ふぐっ

静か…に…

ふぁっ

ハア

ハア

…落ち着いた？

ぶるぶる

落ち着いてない

こっこれはあのっそのっ！

ばっ!!

男の人だもんねっそうだよねっ

ごめんっ空ちゃんっ変な物見せて

あっうんっえとっ…大丈夫っ

…恥ずかしいけどこれはチャンスかもお兄ちゃんに恋愛対象として見て欲しいって伝えられる…

ドキ

ドキ

ドキ

それに…もしかしたら莱香さんよりも…

ねえ…お兄ちゃん…

え？

ドキ
ドキ
ドキ
私が手伝ってあげようか？
えっ
うまくできるか分からないけど…
ドキ
ダメだよ こういうのは 好きな人のために することなんだからっ
ドキ
私…お兄ちゃんが好きだよ…？
ドキ
違うよ！ 恋愛としての 好きっていう意味っ
そうだよ
ドキ
私… お兄ちゃんが 好き…

空…ちゃん…

ビキッ

じゃ…じゃあ…コレ…手で擦ってくれる？

ん…

ドキ

びくっ

びくっ

ドキ

はっ!!

いっ…イヤ…って…手だけなんてやだ…っ

もじっ

ちゃんと…お兄ちゃんとエッチしたい…

……

ドキ

ドキ

ドキ

実は…俺も初めてなんだ

だから…うまく出来るか分からないし…

うまくできなくてもいいよっ！お兄ちゃんとしたい……

ドキ
ドキ
ドキ
…わかった…
お兄ちゃん…
ごくっ
じゃあ先に指で慣らしていくね…
ハァッ
うん…
すごい…これが女の子の…
ハァ
ドキ
くにゅっ
ドキ
ここ…かな？
ハァッ
くぷっ
んっ
ドキ
ふ…っ
ぬちっ
ドキ
ぬちっ
ふっ…
ぬぷっ
ドキ
ドキ
……
ドキ
ハァッ
ドキ
ハァ

ドクン
ごめんっ
ギッ
ギッ
ドクン
もう俺待つの無理かも…っ
ドクン
ドキ
いいよ…お兄ちゃん来て……
ドキ
ドキ
スリ
スリッ
空ちゃん声…我慢して…ねっ！
ドキ
ズボッ
っ…！

…すご…いっ…
お兄ちゃんの…が
入ってる……っ

ハアッ

ハア

ドキ

ドキ

ドキ

動くよ…
空ちゃん…

うん…

ドキ

ぐいっ

んっ…

ズキュッ

痛い？
大丈夫？

ハアッ

ハア

ドキ

大丈夫…
思ったよりも
痛くない…

それより…

つながれた嬉しさで
どうにか
なっちゃいそう

ハァ

ハァ

空ちゃん…

キューンっ

ハァ

ぬっ

ぬっ

ぬちっ

ぬちょっ

ぬちっ

ドクン

ドクンッ

ドクンッ

初めて…
本当に俺で
よかったの？

はっ

はっ

うん…っ
お兄ちゃんだから
したん…だよっ

空ちゃん…！

ズバッ

んっ…！

…っふ♡

ごめんっ俺抑えられないっ…！

ハッ

ハッ

くぅ…んっ♡

ハッ

ハッ

っ…空…ちゃ…っ

ハッ

ハッ

はあっ

いいっよ…きてっお兄ちゃんっ！

はあっ

…っ♡

…っ♡

お兄ちゃんっお兄ちゃん…っ

今だけは莱香さんのことを考えないで…っ

私の恋人でいて…！
ぶんぶんっ
ぶんっ！
ぶんっ！
ぶんっ！
ハァ
お…お兄ちゃ…
ハァ
ハァ

叔父さんっ
起きて下さいっ！
ほらお姉ちゃんも！

おいたん
おきろー！

ん…
美羽……

ぱちっ

ふぁあ…
…あ…
おはよう…

っ！

かあっ!!!!

もー…また
くっついて寝ちゃって
そんなに一緒に居たいなら
ひなとお姉ちゃんの間に
カーテン引こうか？

…っちがっ
たまたま
だってば！

叔父さん
お姉ちゃんとの
寝心地はどうでした？

い…いや
あの…その…

痛っ…

ズキッ

昨日の…夢じゃなかったんだ…

ふふ…っ

ん？お姉ちゃんにやけてどうしたの？

どおたの？

いっいや別に…

うそーなんか隠してるー

隠してなんかないよーっ

これでちょっとは莱香さんに勝ったかな…

いつかお兄ちゃんときっと……

end

PAPAKIKI

「ああっ、あんっ、あぁ、はぁ……！
あなたぁ……！」
俺は今、自分には勿体ないくらいの美しい女性の身体を抱いている。
「あうっ、んくぅぅっ！
奥に……あなたのが当たって……飛んじゃいそう……！」
彼女はいつも見せる飄々とした様からは想像もできない、か細く甲高い啼き声を上げて。
「あっあっあぁっんっ……ひうっ、はぁ……くはぁぁぁ……ん！」
俺は彼女をさらに激しく貫くと、彼女もさらに激しく声を上げる。
「んはぁぁっ！
あなたっ、あなたぁっ！
ひあぁぁぁ……んっ！」
全身を反らせて感じる彼女の姿に、俺は胸がいっぱいになる程の興奮を感じる。
「んんっ、あぁっ、あはぁぁぁっ、だめ、だめ、すごい……！
イきたい、イかせてぇぇっ！
はうぅぅっ！」

イきそうなのは俺も一緒だった。
「俺も、……俺もイきそうだ……！」
「来て……！
来てぇっ!!
私の奥に……あはぁぁっ、あなたの子種を……いっぱい……！」
彼女の奥が小刻みに収縮して、俺の陽根をしゃぶるみたいに吸い付いてくる。
そして、俺の中の堰がついに爆ぜる。
「うくぅぅっ！」
ぶびゅうっ!!
びゅくっびゅくっ……びゅるるるるっ!!
大量の精が彼女の奥をめがけて解き放たれた。
「いっくぅぅぅっ！
くはぁぁぁぁぁ～～～～っ！」
同時に、愛する彼女も身体を硬く硬直させながら達した。
「んふぁぁぁぁっ！
おなかの奥が……灼けちゃいそう……！
私のナカ……あなたので……溢れてる……」
俺に向かって両手を伸ばし、幸せそうに涙する彼女。
そして、全てを解き放った俺は、そのまま力尽きて、彼女の胸に突っ伏した。
そんな俺を、その伸ばした両腕でふわりと包み込むようにかき抱く

彼女。
ふわふわ柔らかな胸と、優しく包み込む腕とに包み込まれて、どのくらい経っただろうか。
俺が息を整えて視線を上げると、そこにいるのはいつものちょっと無表情な彼女の顔。
でも、ほんの少しだけ、口元が柔らかく上がっているのと、穏やかな眼差しから、彼女が嬉しそうにしていることが俺にはわかる。
「ごめん、重かっただろ？」
そう尋ねる俺に、彼女は。
「大丈夫。
もう慣れた。
それより……」
「ん？」
「こんなに連日、大量に中に出されてしまっては、遠からず子供を授かってしまいそうだ」
「……莱香は子供は欲しくないの？」
「欲しいに決まってる。
でも……」
「でも……何？」
「あまりに早くできてしまっては、これだけエロスが爆発しているあなたのことだ。
妊娠中は安定期にならないと全く相手はできないからな。
浮気が少し心配だ……」
「そんなことないって。
俺は莱香一筋だし」
「それならばいいんだがな……」
彼女はそう言って溜息を一つついた。
そして、小声で呟く。
「最も危険な……は……すぐそこに……。
やはり……」
「え？」
彼女のつぶやきが皆まで聞こえなかった俺は、素で聞き返すが。
「いや、なんでもない」
「……？」
首をかしげる俺に、莱香は……。
「そんなことより……」
「ん？」
「キミはもうこれでおなかいっぱい？」
「えっ……!?」
「一回射精したくらいじゃ、まだまだ足りないくらいだろう？」
「そりゃまぁ……そうだけど……」
「じゃあ、２Ｒめはちょっと趣向を変えて、これを付けてやってみよう」
そう言って莱香が差し出したのは、一枚の黒い布。

「これを付けるって……？」
「つまりは、こうするんだ」
彼女は俺の背後に回り、俺の頭にそれを巻いた。
つまりは、目隠しという事だ。
明かりを落とした暗い部屋の中、彼女の人影すらも見えなくなる。
「じゃあ、あなたはそこに仰向けに横になって待っていてくれ」
「わかった」
俺は莱香に指示されるまま、それに従った。
「では、第2R、始めようか」
彼女のその言葉と共に、ベッドの軋む音がして、彼女がちょうど俺の腰の辺りの位置に来たのがわかった。
そして、彼女がベッドの上にひざまずいて、その脚が俺の腰にくっついた。
それに続き、彼女の指が俺の陽根を包み込むように握り込む。
……ん？
なんかいつもより握る力が弱いような……？
「ん？　どうしたんだ？
そんなおっかなびっくり握らなくても……」
彼女は俺の言葉には答えず、もう少し強めに握ってくる。
それから、熱く濡れた彼女のクレバスに俺の肉槍の切っ先が触れる。
いよいよ、あの蕩けて柔らかく包み込む彼女の膣へと導かれるのだ。
彼女が腰を下ろしてきて、俺の肉棒にその体重がかかってくる。

「……っ！」
短く声を殺した息遣いが聞こえる。
……なんかちょっと手こずっている感じなのか？
入口がすごく狭い気がする。
なかなか入っていかない俺の肉槍。
いつもはスムーズに滑り込むように入っていくのに。
……どうしたんだろう？
「なあ、莱香？」
俺が彼女に尋ねようとしたその時だった。
何かが弾けるような感覚を先端に感じた。
……同時に。
「くうっ……！
くふぅぅぅ……！」
……えっ!?
この声……莱香じゃない！
そのことに気付いて呆然とする俺をよそに、俺の肉槍は彼女の胎内にずるりと滑り込んでいく。
その膣はゴムで締め付けられるかのようにキツキツで、そして、奥に辿り着いたその場所は少し深さが浅かった。
どう考えてもいつも味わっている彼女の膣と比べてとても幼さを感じるものだった。
「まさか……その声は……空ちゃん？」

「うぅぅ……」
痛みを堪えてすすり泣く声が寝室に響く。
その時、別の人の気配を枕元に感じる。
その気配は、俺の目隠しを解いて外した……。
暗がりの中、俺の目に飛び込んできた光景は。
枕元で俺を覗き込んでいる一糸まとわぬ姿の莱香と。
そして、俺の腰に乗っているのは、こちらも何も身に着けていない、全てをさらけ出した姿の空だった。
「莱香……？
これは……」
尋ねようとする俺の言葉を手で制する莱香。
「実は、少し前から空ちゃんから悩みを打ち明けられていてな……。
どうしても、あなたのことが諦められないって、私の目の前で泣かれた……」

「ごめんなさい、莱香さん……。
私……どうしても、おにいちゃんのことが諦められなくて……」
「……そう……。
でも、私は知っていたよ。
空さんの気持ちも、私がこの家で一緒に暮らすようになってから、ずっと悩みを飲み込んで、明るく振る舞ってきた事も」

「……莱香さん……」
「空さんは、私がこの家で居心地が悪くならないように、自分の気持ちを押し殺して、気を遣ってくれてたんだよね。
私はそれを知っていたのに、空さんが苦しんでいるのを助けてこなかった……。
謝るのは空さんの方じゃなく、私だ……」
「でも……お兄ちゃんが莱香さんを選んだだけだもの。
私が勝手にお兄ちゃんを好きで、諦められずにいるだけで、二人とも悪くないの……！
でも……どうしても……諦められなくて……苦しいの……」
空さんはそのまま、うめくように嗚咽の声を漏らす。
「ごめんなさい……。
こんな相談なんかして……。
莱香さんだって、困るだけなのに……」
私は、そう言って俯く空さんを抱きすくめた。
「……莱香さん？」
「空さん……よく言ってくれたね。
誰にも言えなくて、苦しかったでしょう？」
「え……？
莱香さん……怒らないの……？」
「どうして私が怒らなきゃならない？」
「だって……私は……お兄ちゃんに……莱香さんの旦那様に横恋慕

してるんだよ？」
「それでも、私は空さんを怒る気にはなれない。
それに元々私は、空さんの気持ちを知っていたし……」
「でも……諦めなきゃ……だよね……。
今更どうしようも……ないもんね……。
だけど……どうしても、お兄ちゃんが好きで、好きで……」
「……一つだけ、方法がないわけでもない」
「え？」
「空さんはずっと祐太の側にいられれば、祐太に愛してもらえれば、
それで良いんだね？」
「う……うん……。
それはそうだけど……」
「だったら、方法がないわけじゃない。
ただ……この方法は覚悟が要るよ。
それでもいい？」
「まさか、それって……？」

「……ということだ。
すべて空さんは了解済みだ」
「だからって……空ちゃん、ごめん！
俺……すぐに離れるから……！」

「だめぇっ!!」
彼女の下から脱出しようとした俺だったが、空ちゃんの叫び声で動きを止める。
「……空……ちゃん……？」
「お願い、お兄ちゃんが私のこと愛してくれなくても、初めてだけは……最後まで、してよ……！」
「でも……」
俺は莱香の方を見る。
「こうするのが、いちばんいいんだ」
「お願い、お兄ちゃん！
私、どうしても、お兄ちゃんを諦められないの……。
それとも、お兄ちゃんは私のこと、嫌い？」
「そんなことはないが……」
莱香も、静かに頷いている。
「……わかった……。
空ちゃん、後悔……しないな？」
「するわけないよ！
だって……大好きな人と。結ばれたんだもん……！」
感極まって涙する空ちゃん。
「じゃあ、ここからは俺が動くね……」
「うん……！」
俺は繋がったまま身体を起こし、正面から空ちゃんを抱き締める。

そして、ゆっくりと彼女の膣の中を動き始める。
「ううっ……！
くぁ……っ」
「大丈夫か、空ちゃん？」
「うん、大丈夫……。
そんなに思った程は痛くない」
空ちゃんのその言葉に、俺はそのままゆっくりと彼女の深いところを突き上げる動きを続ける。
「あっ……うんっ、はぅ……んっ、あっ、くぁっ……」
少し背筋を反らせながら、空ちゃんの膣は徐々に柔らかくほぐれて、俺を主として受け入れてくれるようになっていく。
「空ちゃん……どう？」
「うん……ちょっと、気持ち良くなってきた……。
それより……」
「ん？　どうした？」
「私のことは……空って、呼んで……」
「じゃあ、空……」
そう呼ぶと、彼女は嬉しそうに微笑んで、両手を自分のおなかに乗せる。
「うん、祐太さん……。
ここに、祐太さんがいるよ……。
私、すごく幸せ……！」
「そうか……。
空のナカも、温かくて気持ちいいよ」
「ホント？
嬉しい……！」
自然とお互いの興奮が高まって、先ほどより抽送のペースが上がる。
でも、空の顔にはもう苦しそうな表情はどこにもない。
幸せで、嬉しくて、とにかく気持ちいい。
そんな陶然とした表情で、俺を真っ直ぐ見つめている。
「祐太さん、思いっきりして！
私のナカで、射精して！」
俺はその声に頷いて、空を思い切り突き上げ始める。
「ああんっ！
いいっ、いひぁ……あん、あぁっ、あん、あん、あっあぁっはぅっんっ！
んふぅぅぅんん～～～っ！」
おとがいを反らし、全身を震わせて初めての性の営みを感じる空。
ふと、上向いた彼女と視線が合う。
空は、そのまま瞼を伏せた。
俺は彼女を突き上げながら、くちびるを重ねた。
「んんっ、んむっ、んふぅぅぅっ！
んっんんっあむっ、ふむぅっ、んくぅぅぅっ！」
かなり激しくくちびるを貪っても、空も必死で俺のくちびるに吸い

付いて離れない。
「んむぅ、んくっ、んっんっんっんむっ、んはぁぁぁぁぁ……んっ！」
俺の肉槍の切っ先が、彼女の子宮口の窪みに一瞬深く突き刺さった瞬間、空は全身に電流が走ったかのように強く反応。
思わず唇を離してしまう。
「もう、ばかぁ……！
せっかくのファーストキスだったのに……。
もっと味わいたかったよぉ……」
「ごめん……。
でも俺も狙ったわけじゃなくて……」
「うう……あんっ！
ばか、止まりなさいよぉ……いひっ！
くはぁぁぁぁっ、だめ、壊れちゃう……！」
「いいから、もっと、感じて……」
「あぁぁぁぁ……っ！
やだ、恥ずかしくて、死んじゃう……！
んはあっ！ だめ、そんなに子宮揺すっちゃ……！
ひぅぅぅ〜〜〜〜っ！」
全身を硬直させ、小さく達する空。
きゅうきゅうと窄まる膣口が、俺を離さないとばかりに根元を掴み。
その奥ではうねうねとうねる膣肉が俺の亀頭をしゃぶるみたいにして懸命にご奉仕をしてくれる。

そんな歓待を受けて、俺の方もそろそろ限界だ。
俺は最後の気力を振り絞り、吹き出しそうになる欲求を懸命に抑え、必死で腰を彼女の奥に向けて叩き付ける。
「ああっ！ ああっ！ んはぁぁぁっ！
もうだめぇっ！
飛んじゃう、とんじゃうぅぅぅっ！」
「そのまま、身を任せて！」
「うん、うんっ！
わかった……！
あっああっあんあんあふぅぅぅっ！
ひあぁぁぁぁ〜〜〜〜っ！」
びくびくっ！ ……びくんっ！
空の身体が一際大きく海老反って硬直する。
「あああぁぁぁぁぁ〜〜〜〜〜っ！」
その瞬間、彼女の膣が痙攣するようにぎゅっときつく窄まる。
「くぅぅっ!!」
びゅるるるっ！
びゅるっ、びゅるっ！
びゅくっびゅくっびゅくんっ……！
今夜二度目とは思えない量の精が空の狭い胎内に飛び出していく。
「あぁぁ……熱い……！
これが……祐太さんの……」

そう言ってきゅっと目をつぶった空。
その目尻からは、止めどなくこぼれる涙。
……そして、空はその夜から正妻の莱香公認の俺の嫁になったのだった……。

それからほどなくして。
「え？
らいかおねーたんに、あかちゃんができたの？」
「そうだよ。
ひなも、来年にはお姉ちゃんになるんだぞ」
「ほんと？
おとこのこかな、おんなのこかなあ？
ねえ、どっちなの？」
「そうねぇ……。
どっちなんだろうね？」
愛おしげに自分のおなかに手をやりながら、ひなに微笑みかける莱香。
そう、彼女のおなかの中には、俺と彼女の愛の結晶が宿っている。
遂に、俺もパパかぁ……。
なんだか、そう思うだけで胸の奥にグッとくるものが。
「叔父さん、顔、顔。
にやけすぎてすごいことになってるよ！」
「あっ、ごめん、美羽ちゃん！」
「しょうがないなぁ、叔父さんは。
ね、お姉ちゃん」
「ほんと、しょうがない人」
空がちょっと呆れたように溜息をつく。
「でも、良かったね。祐太さん」
「叔父さん、幸せいっぱいのところ悪いけど、ちゃんとお姉ちゃんのことも、幸せにしてよね」
「もちろんわかってる。
まあ、今はまだしばらく子供は作れないけど、いつか……な？　空」
「うんっ！」
空は、初めて結ばれたあの日から時折見せるようになったとびきりの笑顔で笑った……。

こんにちは。Ricoです。
パパ聞き本です。
お手に取ってくださりありがとうございました!

パパ聞き、原作は読んだことなかったのですが
アニメでハマりました。
…といっても一話目から見てなかったのですが…。
その後コミカライズ漫画と原作小説読んで
またハマり。
描きたい熱がふつふつと・・・・・・で、同じくアニメからハマった
tacaを誘って本作っちゃいました。

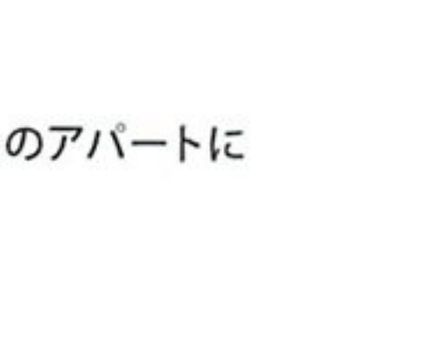
私のほうはアニメ最終回前が舞台で、まだ祐太のアパートに
住んでる時のお話です。

ちょっと切ない空ちゃん片思い話?・・・かな

読んで下さりありがとうございました。

2012.04.15 Rico

続きましてゲストのtacaさんコメントです。



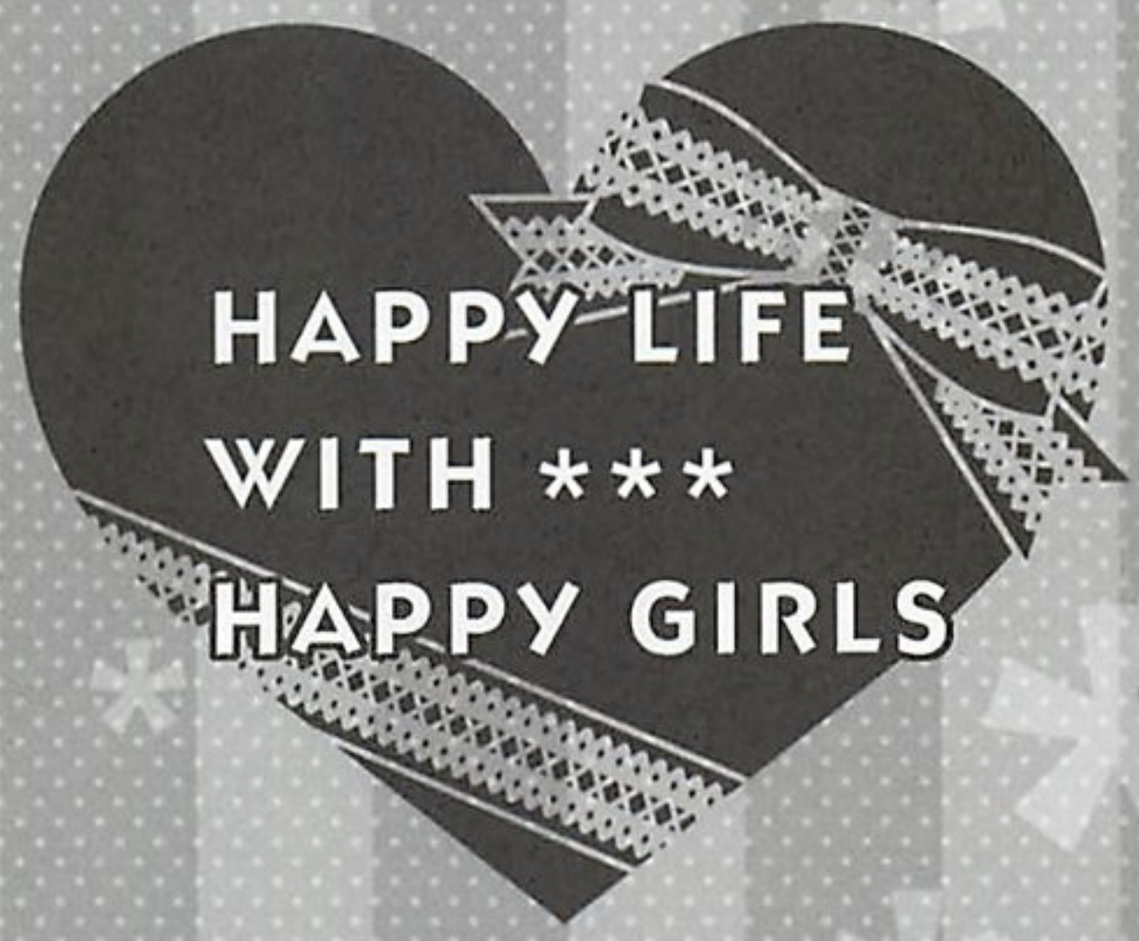
最後までお付き合いくださいましてありがとうございました!
ゲストのtacaです。

今回はこの冬の深夜に、某商業作品の作業中にたまたま
「パパ聞き」アニメを見てて、久々にこの作品で本を書こう!と、
琴線に触れちゃったので作っちゃいました!

特に僕は最終回の終わり方が、すごくお気に入りで。
これが最後の決定打になりましたね。
そこから今回の話が浮かんできたわけなんですが、
お楽しみ頂けたでしょうか?

ところで……。
何で僕の小説側のタイトルがいつの間にか本のタイトルになってんの?

2012.04.15 taca拝



HAPPY LIFE WITH HAPPY GIRLS
(For adult only)

発行日:2012年4月15日
発　行:Rico-ba (Rico)
連絡先:ricorico_mail@yahoo.co.jp
URL　:http://rico-memo.jugem.jp/

HAPPY LIFE
WITH ***
HAPPY GIRLS